

校註建禮門院右京大夫集

本位田重美編

武蔵野書院刊

校註 建禮門院右京大夫集

本 位 田 重 美 編

武 蔵 野 書 院 刊

昭和二十五年三月十五日 印
昭和二十五年三月二十八日 発
昭和四十年三月十五日 十二版発行

校註 建礼門院右京大夫集(完)

定価 一五〇円

編者 本位田重美

東京都千代田区神田錦町三ノ十一

発行者 前田武

東京都文京区白山御殿町十八番地

印刷者 柿崎忠一郎

東京都千代田区神田錦町三ノ十一

発行所 合名 武蔵野書院
会社

電話東京 四八五九番

振替口座東京六七一四六番

凡 例

一 本書は大學、及び高等諸學校用教科書として編纂したが、また廣く一般の緋讀にも耐へるやう留意した。

二 底本には群書類従本を用ひた。但し、その中で誤脱と認められる箇所は、吉水神社本、圖書寮本、無窮會本、及び刊本等を參看し、よきに從つて改めた。

三 頭註は簡明を旨としたが、緒に就いてなほ日の浅い本書研究の現狀に鑑み、解釋の傍證とたるべき引例や、考證の結果知り得た人物などに關する註は、努めて多く擧げておいた。

四 解題中の右京大夫傳は、編者の行つた考證の結果に基づいて略述し、資料の引用や考證の顛末はなるべくこれを省略した。それらを必要とせられる方は、紫乃故郷舎より刊行せる。拙著「評註建禮門院右京大夫集全釋」について見られたい。

五 本書によつて右京大夫傳を講ぜられる場合を考慮し、附録として藤原隆信朝臣集、拾玉集等より必要な部分を拔萃附載しておいた。

昭和二十四年四月

編 者 し る す

建禮門院右京大夫集解題

一、傳記

六波羅第の花の宴に榮華の夢を極め、「この一門にあらざらむものは人非人」とまで揚言した平氏が、ひとたび壽永、元暦の疾風に吹きさらされると、さながら一葉の枯葉のやうに飛び散つて、はかなくも西海の藻屑と消えた轉變のはげしさをまのあたりに見たものは、平家物語の作者でなくとも、誰が世のあはれを感じないであれようか。まして平家所縁のものならば、「夢とも幻とも、あはれとも、何とも、すべてくいふべききにはなかりし」と嘆かれるのもまた當然であらう。われわれの周圍にも最愛の人を戦場に失つた多數の女性がある。よるべなく世の荒波にもまれながら歸らぬ人によせるその嘆きの切なさを感じとることのできる人は、ここに、同じ嘆きに耐へぬいた建禮門院右京大夫の切々の記録を繙いて一掬の涙をそそがれるがよい。

建禮門院右京大夫は、能書の譽高い藤原伊行を父とし、稀代の筆の名手であつた夕霧を母として生まれた。生まれたのは保元元年から三年までの間、保元二年あたりではないかといはれ

てゐる。父の伊行は能書家であつたほかに、源氏物語に最初の註釋を施した古典研究家でもあり、また和歌や管弦にも造詣の深い人であつたから、右京大夫はかうした兩親の薫陶を受けて、筆に和歌に書道に、行くところ可ならざるはない才媛として成長していつた。

承安三年頃、高倉天皇の中宮で、今を時めく清盛の女、後の建禮門院の御許に宮仕することになつた。當時父の伊行は病氣か何かで既に引退してゐた模様で、右京大夫は歌人藤原俊成の養女分として出仕したものと思はれる。俊成の養女となつたのは、かつて母の夕霧が俊成に嫁して尊圓といふ男子を生んだが、後に尊圓をつれて伊行に再縁したといふやうな事情に基づくらしい。右京大夫といふ召名は當時の俊成の職名によるものであつた。右京大夫の日記はこの宮仕の翌年、承安四年正月の記事から始まつてゐる。

右京大夫の多方面な才能は、後宮の六十人にあまる同僚の女房の間にあつてもひとときは輝きを放つものであつたらしい。それは歌人藤原隆信が彼女のことを「中にすぐれてきこえし人」といつてゐることからも理解できる。ことに當時は後白河法皇以來音樂のもつとも盛んな時代であつたから、名手夕霧の女であり、傑出した筆の技倆を持つてゐた彼女は、人々の注目的となつた。宗盛、重衡、維盛、資盛、清經、經正など平家の公達、さては實宗、隆房などといふ當時一流の貴公子たちが彼女の周圍に集まつてきた。かうして、いつしか彼女の一生の嘆き

の種となる資盛との縁が結ばれることになったのである。

彼女の相許した男は、しかし資盛ばかりでなく、實はほかに前述の藤原隆信があつた。隆信は藤原爲隆の子、母は歌人美福門院加賀であつた。母が後に隆信をつれて藤原俊成に再縁したため、俊成に養はれることとなつた。歌人であるとともに、肖像畫をよくし、また物語作者としての才能もあつたやうである。治承元年の春の頃であつたらうか、十五歳も年長の隆信から彼女はしつこい求愛を受けてゐた。が、言葉だけはこまごまとやりとりしながらもなほ相許すことをしなかつた彼女に、資盛との逃れがたい縁が突發的に結ばれたのである。世慣れた押しの強さを持つた隆信は、資盛との間に起つた事件を耳にしながらも、やはり彼女を求めることをやめなかつた。彼女はこの押しの強さに負けたのであらうか、それともまた、彼が俊成の所縁でもあり、保護者として頼むに足るものがあつたからであらうか、同じ年の夏の頃には遂に隆信とも相許す仲となつてしまつたのである。

しかしながら隆信は、彼女自身が「よ人よりも色このむときく人」と評してゐるとほり、しよせんは彼女ひとりを守り通すことのできるやうな男ではなかつた。しかも、彼女との間には資盛といふ権門の公達が介在してゐる。逢ひそめた當初のうちこそその交渉も頻繁で、こまやかな交情を示し合つてゐたやうであつたが、時とともに二人の間に次第につめたい溝の出来るや

うになつたのは、けだしやむを得ぬことであつたらう。さうして、それと反比例して資盛との愛情が白熱してくるのである。家集の前年の主要部分はかうした二人の男との愛情の記録で、彼女のこまかな感情の動きが含蓄深い筆致で書きしるされてゐる。

治承二年の秋の頃であらう、彼女は心ならずも宮仕から退くことになつた。退出の理由は、一資盛との間柄が人の口にのぼるやうになつたからかとも疑はれるが、それよりも寧ろもつと平凡な理由、たとへば母夕霧の病氣などが理由だつたのではなからうかと思はれる。翌治承三年五月に夕霧は病歿してゐるから、前年の秋頃から病床に親しみ勝になつてゐたといふことも想像しやすいことであるし、父伊行は既に四年前の安元元年に他界してゐるので、病母の看病にどうしても右京大夫の手が必要であつたのであらう。里の住居は東山の麓、今の祇園、松原のあたり、そこで彼女は中宮の御産、皇子の立太子の儀によそに聞きながら、母ひとりを頼りに心細いその日その日を送ることになつた。その頃は絶え絶えではあつたらうが、まだ隆信との関係も清算されてゐなかつたし、資盛もひと頃とはちがつてよそよそしくはあつたものの、時は彼女の前に姿を見せるといふやうな状態で、あれこれと思ひ屈し思ひ悩みながら日を送つてゐたのであらう。

退出の翌年の五月、母夕霧は病歿した。彼女にとつて頼りになる身寄りとしては、もう同母

兄の尊圓よりない。當時尊圓は慈圓の西山善峰寺の僧坊にゐたらしく、彼女はこの兄を頼つて西山に移り住むことになつた。隆信との交渉もその頃にはすっかり絶えてしまひ、時折り訪ねて来る資盛をひたすらに待ちうける靜かな生活が續くやうになつた。

その頃、平家をめぐる世の動きも次第にただならぬ雲行きを見せはじめて來た。その年の秋七月には重盛が薨じ、十一月には太政大臣師長以下法皇昵近者三十九名の官を停められるといふやうな大事件があつた。翌治承四年には二月御讓位、五月頼政の舉兵、六月福原遷都、八月頼朝舉兵と天下の耳を驚かすやうな事件が相ついで起つてゐる。かうして治承、養和、壽永、元暦にわたる源平の大動亂の時代が始まるのである。この慌しい明け暮れの暇を見て、資盛は遠い西山まで足を運んでゐたのである。たとへ訪れが間遠であつたにしても、怨みをいへばきりがない。やはり彼女は悲しくも幸福であつたといはねばなるまい。

しかし、この悲しい幸福もさう長くは續かなかつた。かねて覺悟をしてゐたことではあつたが、二人の間の引き裂かれなければならぬ日が遂に來た。壽永二年七月二十五日、平氏一門は都の邸宅を焼き拂ひ、主上を擁して西海への歸らぬ旅に赴くことになつたのである。「壽永元暦のころの世のさわぎは」といふ書き出しに始まる家集下卷は、秋の日のやうに慌しい平氏の没落と、これに處して泣くよりほかにすべのない彼女の心情が語られてゐて、切々として人の

胸を打つものがある。さうして、翌々壽永四年春三月二十四日、資盛は主上とともに壇の浦の藻屑と消え、ここに彼女はなき人の面影を唯一つのよりどころとして生きねばならない身となつた。

限らない悲痛を抱いて建禮門院が西海から還御になつたのは同年四月であつたが、五月一日には御落飾、十月には都の住居ものういとて、遠く洛北大原の寂光院に御移徙になつた。右京大夫が女院を大原にお訪ね申したのは翌文治二年の秋であつたらう。變りはてた御姿を拜して涙にくれたことも、いはば一つの悲しい慰めであつたと思はれる。

彼女が比叡坂本のあたりへの旅を思ひ立つたのは、大原から歸つて間もない文治二年の初冬のことであつた。これは多分、鬱々として樂しまぬ彼女の姿を見かねた尊圓又は慈圓の配意によるものであらう。旅先に見る風物もすべて資盛の追憶と結びつけてしか考へられない彼女ではあつたが、それでも彼女の深く思ひつめた心情をはぐらかすにはある程度役立つたには違ひない。

その後彼女は兄とともに九條河原にあつた法性寺の僧坊を移つてゐる。また世にためしがないと思ひつめた悲しみは忘れられる筈もないけれども、「時」といふ不思議な恵みによつて、彼女もこの僧坊に移り住む頃からは、靜かな悲しみにひたりながら、なき人の菩提をとむらふ

とともに、忘れ難い思ひ出をぼつぼつと書き始めた。さうしておそくとも文治四五年頃には家集下巻の七夕の歌の部分までが一應成立したのである。追憶の筆をおいて、しみじみと秋天の星を仰いでゐる右京大夫の姿が、私にはまさまざと見えるやうに思はれる。

右京大夫はその後も兄とともに寂しいがもの靜かな生活を續けてゐたと思はれるが、「思ひの外に年へて後」、再び宮仕に出で立つこととなつた。これも多分慈圓などの配意に基づいたのであらう。時は建久七八年頃の秋のことであつた。彼女の年齢はもうその時は四十歳、すべては遠い思ひ出とはなつてゐたけれども、再び出仕してみれば、見るもの悉く思ひ出の種ならぬはない。やらむ方なき悲しさに彼女はまた涙を新たにするのである。が、その悲しみも今となつてはひと頃のやうな切實なものではあり得ない。忘れるといふわけではないけれども、事繁き宮中の明け暮れにまぎれて、その長い晩年の生活を平和に送つていつたのではないかと思はれる。彼女の歿年は明かでない。すくなくとも七十歳以上の長壽を保つたといふことだけは推定できるが、その間の出来事を時々思ひ出すままに家集の後にぼつぼつと附け加へていつたらしい。記事も多くはなく、配列の順序もまちまちであるが、晩年の彼女に訪れた二つの喜びをここに書き加へて、この項を終りたいと思ふ。

その一つは建仁三年十一月二十三日、五條三位入道俊成の九十の賀が二條殿で行はれた時、

後鳥羽院の仰せで贈り物の法服の装束の袈裟に歌を刺繍したことである。歌の作者も重代の家柄の者を特に選ばれたのだといふから、彼女が選にあづかつたのもやはり同様の事情によるものに違ひない。これは能書の譽高い世尊寺家に生まれた身としてこの上もない喜びであつた。

それからもう一つは藤原定家が新勅撰集撰進の材料として彼女の家集の一覽を求めたことであるが、殊にわれわれの注意をひくことは、撰集に昔の名を記載することを望んで許されたことをこの上もなく喜んでゐることである。彼女が七十に餘る年になつてから後も、二十年以上にわたる後の官仕の名を捨てて、僅々六年に滿たない昔の名を残さうとした節操のきびしさ、これこそ右京大夫集全篇を貫ぬく哀戀の點睛をなすものであり、われわれに對する限りない魅力となつてゐるものである。

二、諸 本・研究

建禮門院右京大夫集には特に異本として立てなければならぬほど異同のはげしい傳本は存在しない。が、現存の諸本（今次戰災で焼失したものを含めて）を参看すると、大體次の三系統に大別することが出来るやうである。

（一）吉水神社本

吉野吉水院所藏本。新待賢門院御筆と傳へられ、重要美術品に指定せられてゐる。比較的正しい本文を傳へてゐるかと思はれるふしもあるが、上卷のみで下卷の散佚してゐることは惜しむべきである。この本は佐佐木信綱博士校訂の富山房百科文庫「建禮門院右京大夫集」の底本となつてゐるから、今は誰でもついて見ることが出来る。

この系統の本としては、ほかに内閣文庫藏本がある。これも上卷のみで下卷が散佚してゐる。

(一) 正元本

正元二年二月承明門院小宰相本をもつて書寫したといふ奥書をもつものを一括して正元本と稱する。

小宰相本の原本は、七條院大納言が著者自筆本を借り受けて書寫しておいたものであるといふ。七條院大納言は新古今の歌人、三條内大臣公教の孫、中納言藤原實綱の女で、初め高倉院の典侍であつたが、後、七條院に仕へた。家集上卷に、「大納言の君と申すは三條内大臣の御むすめとぞ聞えし」とある人で、右京大夫とは若くより昵近の間柄であつた。「三條内大臣の御むすめ」とあるのは、祖父公教の養女分として出仕したからであらう。また承明門院小宰相は新勅撰集の歌人、壬生二品家隆の女、土御門院小宰相のことである。従つて、

この系統の本は、現存諸本中もつとも傳來の明るいものといふことができる。

この系統に屬するものとしては彰考館本、宮内省圖書寮本、無窮會神習文庫本等が注目すべきものであらう。彰考館本は寛永七年の書寫で、その原本は正元本系統の寫本に、貞和二年津守國夏親筆本をもつて校合を加へたものであつたらしい。圖書寮本は小宰相本を正和五年六月書寫した由の奥書があるが、これは勿論その轉寫本で、しかもその原本は相當大きな錯簡、脫落をもつものであつたやうである。上卷第六「うらやまし」より第一五「春きぬと」までの十首が第七九と第八〇の間に混入してゐるのや、下卷第二八八「あはれとや」の下句から第三四〇「またも來む」の上句迄五十一首が脫落してゐるのは原本の誤脱を繼承したものであると思はれる。この本は富山房百科文庫本に校合されその異同が註記されてゐる。次に無窮會本は書寫年代は比較的新しいが、圖書寮本に見られるやうな錯簡や脫落が全くなく、正元本の本來の姿を比較的正しく傳へてゐるものではないかと思はれる。

(三) 群書類従本

大きく見れば、刊本もこの一類のうちに入れておいて差支へないものと思はれる。

刊本には寛永二十一年刊本、萬治二年刊本、寛文二年刊本、及び無刊記本等があるが、いづれも中野道也刊で、内容は全く同一である。その原本は、奥書によれば、永享十二年三月

藤原利永が左衛門尉平氏數本をもつて書寫したものであるといふ。本文は正元本と多少似てゐるところもあるが、大體において類従本の系統に屬するものであると思はれる。註記が本文中に混入してゐる箇所が多く、あまり善本であるとはいへない。

群書類従本は古寫本ならびに印本をもつて校合を加へた由奥書に記してあるが、この古寫本とはどういふ素性のものか明かでない。ただし、類従本の本文から考へて、刊本より遙かによい本文をもつてゐたものだけはいへるであらう。あるいは扶桑拾葉集所収本の原本のやうなものかと思はれるがどうか。本文には多少誤脱もあるが、全體として刊本よりはずつとすぐれてゐる。缺點は稻荷社歌合の歌四首の脱落してゐることである。

明治以降出版せられたもののうち、玉井幸助氏校訂の國歌大系所収本、島田退藏氏編の「建禮門院右京大夫集」は類従本を底本としたものであり、廣池千九郎・山本信哉外二氏編の女流文學叢書所収本は古寫本を底本とし類従本をもつて校合したものだといふ。

次に、右京大夫に關する研究論文、および研究書のうち主なものについて述べる。まづ綜合的な研究書としては

「右京大夫・小侍従」（昭和十七年、三省堂刊）

富倉徳次郎 著

を挙げなければならぬ。本書は傳記、作品、鑑賞の三部にわけて右京大夫集の全貌を見渡すことができるやうに記述されてゐる。從來の研究を集大成した上に著者の多くの新研究を加へて成つたもので、劃期的な好著である。

「月の行方」(明治八年成)

荒木田麗女著

麗女は江戸時代の閨秀作家。高倉、安德兩帝の時代を描いた歴史物語「彌世繼」が夙に散佚してゐたのを惜しみ、その代りとして新たに執筆したものである。所謂研究書ではないが、著述の資料として右京大夫集を活用してをり、その援用の仕方を見ると、彼女のいかにも周到綿密な研究を思はせるに足るものがある。史籍集覽、國文叢書、日本文學大系等に收められてゐる。

「歌學論叢」(明治四十一年、博文館刊)

佐佐木信綱著

この中に「建禮門院右京大夫」といふ一項がある。この論文こそ、從來殆ど人の注意をひかなかつた右京大夫集の價值を稱揚し、世にその研究を促した最初のものである。富山房本に附載されてゐる解説はこれと同文である。これらのほかには

「星夜讚美の女性歌人」(南蠻更紗所收)

新村出

「鎌倉時代の日記紀行」(岩波講座日本文學)

玉井幸助

「建禮門院右京大夫のことども」（國語と國文學昭和七年八月號）池田龜鑑

「建禮門院右京大夫について」（國語國文昭和九年五月號）島田退藏

などが注目される。このうち島田氏の論文は右京大夫と藤原隆信との關係を初めて明かにせられた好論文であつた。

右京大夫集の註釋を施したものはまだ殆ど出てゐない。

「建禮門院右京大夫歌集評釋」（短歌講座所收）佐佐木信綱

のほかに、國歌大系所收本の玉井幸助氏の頭註、朝日新聞社刊「中古三女歌人集」所收本の佐佐木信綱博士の頭註ぐらゐのものであらうか。

最後に、編者が從來發表した論文の題目を左に掲げておく。

「建禮門院右京大夫の研究」（帚木昭和八年一月號）

「建禮門院右京大夫集隨想」（帚木昭和十年二月號）

「建禮門院右京大夫私考」（文藝文化昭和十八年三月號）

「建禮門院右京大夫私攷」（短歌研究昭和十八年十二月號）